

チェチェン問題語彙集 暫定版 (2011.10.06.版)

人名

ジョハル・ドゥダエフ (1944-1996) チェチェン人で最高位のソ連空軍少将から、1991 年独立派によりチェチェン共和国 (イチケリア) 初代大統領に選出され、第一次チェチェン戦争(1994-96 年) を指導した。平和交渉についての通話中の衛星電話を標的としたロシア軍のミサイル攻撃で殺害された。

ゼリムハン・ヤンダルビーエフ (1952-2004) 文学者で、1980 年代から、チェチェン独立委員会、ワイナフ民主党など、チェチェン独立地下運動の草分けの一人。ドゥダエフの副大統領から、その殺害後、大統領代行としてロシアとの休戦、1997 年の民主的選挙実施を指揮。その急進的主張は支持されず、選挙に敗北、下野した。2004 年、亡命先のカタールで、ロシア大使館員と GRU(ロシア陸軍諜報局)将校らにより爆殺された。

アスラン・マスハードフ (1951-2005)ソ連軍砲兵大佐から、ドゥダエフの下でチェチェン軍参謀長として、第 1 次チェチェン戦争を指揮。1997 年には 6 割の支持を集めた民主的選挙により大統領となる。2 年間、ロシア側の揺さぶりと、バサーエフら急進派に苦しめられ、内戦こそ回避したが、有効な新国家建設は叶わず、第 2 次チェチェン戦争に突入、5 年間にわたり武装抵抗運動を指揮した。チェチェン共和国 (イチケリア) 最高検察局がまとめた文書によると、マスハードフは、スイス、ポーランドの大統領まで巻き込んだロシア側の偽の和平交渉により、平原部におびきだされ、投降を迫られたが、拒否したため殺害された。その後、公式には、潜伏先とされる、トルストイユルト村に運ばれ、死体が公開された。この謀略のチェチェン側の窓口になったのは、元保健相で在外総代表であったウマル・ハンビーエフで、本来のロシアとの交渉担当者だった、アフメド・ザカーエフではなかった。その数ヶ月前、不可解な、偽の大統領命令書が出て、ザカーエフは、マスハードフの信用を損ねていた。また、ザカーエフとハンビーエフの間にも確執があった。こうした独立派政府内部の不和をロシア側は巧みについて特殊作戦を遂行した。殺害当時、大統領を出しに使われたポーランドは非常に厳しい外務省非難声明を出している。

アブドルハリム・サドゥラーエフ (1966-2006) イスラーム神学校教師から、独立派抵抗運動に参加。パルチザン戦争に移行したあと、山中でゲリラ戦を指揮するマスハードフによって後継者に抜擢指名され、シャリアート委員会(イスラーム最高法廷)議長から、2005 年春、司令官会議の彼に対する宣誓により、大統領職を継ぐ。イスラーム主義者であったが、柔軟な思考で世俗派との統一維持に腐心した。民間人を巻き込むテロ活動を厳禁し、彼の指導下では、テロ活動が一掃された。2005 年秋、バサーエフと近隣のカバルディノ・バルカリア共和国の首都ナリチクで、急進イスラーム主義者が大規模な騒乱を起こすが、ほとんど一般住民には、犠牲者が出なかった。2006 年夏、潜伏していた故郷の町、アルグンで、警察部隊により殺害された。

ドッカ・ウマーロフ (1964-) 現在は、イスラーム主義武装勢力が唱えるカフカス首長国 (イマラト・カフカス) の首長 (アミル) で、北コーカサス全域の抵抗運動の最高指導者である。チェチェン

の戦間期、マスハドフから国家保安相に任命されたこともあるが、その時期に、人質ビジネスなど犯罪行為にも従事していた。彼の行為については、アレクサンドル・リトビネンコの「ロシア 闇の戦争」にも詳しい記述がある。サドゥラーエフ殺害後、2006年、司令官会議により大統領に指名されるが、翌年秋、イチケリア政府解体とカフカス首長国を宣言して独立派分裂を決定付けた。以後、ロシア各地での一連のテロ事件の首謀者と自らを認めるが、関与の真否は定かでない。イスラーム主義抵抗運動の最高責任者、アミルではあるが、以前からロシア治安当局とのつながりが指摘されてきた。ノーヴァヤ・ガゼータ紙の軍事評論員、ヴァチャスラフ・イズマイロフは、「アメリカの声」放送ロシア語版のインタビューで、彼はアミルであるが、ロシアのエージェントでもあると明確に指摘した。

アフマトハジ・カディロフ (1951-2004) イスラーム神秘主義(スーフィー)のチェチェンにおける最有力教団、カディリー教団指導者の家系に生まれ、ウズベキスタン、ブハラの子供学校に学んだ。ドゥダーエフにより、国家ムフティー(イスラームの導師)に任命され、チェチェンの独立闘争を侵略者ロシアに対するイスラーム聖戦(ジハード)であると宣言した。しかし、戦間期のイスラーム急進主義の伸長と、マスハドフの急進派に対する優柔不断に失望、第2次チェチェン戦争開始にあたってロシア側への寝返りを選び、傀儡行政長官を経て、2003年親ロシア派によるチェチェン共和国初代大統領に任命された。2004年ソ連軍戦勝記念式典会場で爆殺された。バサーエフ派は犯行声明を出す、ロシア占領軍内部の軋轢により謀殺されたと信じるものが多い。

シャミル・バサーエフ (1965-2006) ソ連軍の徴募兵であった経験は持つが、独学で戦術を学んだ独立派野戦司令官。1992-93年にアブハジア紛争に義勇兵として参戦するなど、カフカス全域の解放を目指す立場であった。1997年選挙で、3割の支持を集めるがマスハドフに敗れる。テロ行為も辞さない強硬派でブジョンヌフスク病院占拠事件(1995年)では、ロシア側を交渉に引き出すことに成功するが、モスクワ劇場占拠事件(2002年)、ベスラン学校占拠事件(2004年)などでは失敗、一般住民を巻き込み多くの犠牲者を出した。これらテロ事件は、表面上は独立派政府とは無関係に、最高司令官マスハドフ大統領をつんばり敷において行われた。しかし裏では、マスハドフが欠席した2003年春の司令官会議を仕切るなど、一貫して独立派武装勢力内部のイスラーム主義者の最高指導者(軍事アミル)であった。2006年、隣国イングーシで、大量の爆薬を輸送するトラックに並走中、トラックの爆発により死亡。ロシア側は特殊作戦の大成果と主張している。ロシアのみならず国連なども認めた真正正銘のテロリストだったが、チェチェン人の中では、「ロシア側の国家テロに対し、不屈の戦いを挑んだ民族の英雄」という評価が、ほぼ定着している。彼の肉声を聞くと、実に物静かに話し、冷静な人物でもあった。2000年1月末のグローズヌイ包囲戦撤退にあたり、率先して地雷原を突破しようとして触雷、右脚を失った。その彼を手術し死から、救ったのが「誓い」の著者の外科医、ハッサン・バイエフ医師である。バイエフは、瀕死のバサーエフが、先に若い兵士たちを治療してくれと頼んだことを書き記している。

アル・アルハノフ(1957-) ナクシュバンディ教団指導者の家系に生まれた警察官僚で、ロシア・チェチェン戦争では、独立派に組することなく、常にロシア側について戦った。前任者の殺害後、欧州連合から不正選挙と名指された選挙で傀儡チェチェン共和国第2代大統領に選出されるが、プーチン大統領の

庇護を受けたラムザン・カディオフとの二重権力状態に苦しんだ。権力闘争を嫌い、2007 年大統領職を辞任、その後、モスクワに去り、ロシア連邦法務省次官などに任命された。

ボリス・エリツィン(1931-2007) ウラル出身の共産党官僚からブレジネフ時代の 1981 年中央委員に抜擢され、ゴルバチョフにより 1985 年モスクワ党第一書記に任命され、改革派として、ペレストロイカ政策を推進した。保守派と激しく対立し、1987 年解任された。しかし 1989 年人民代議員選挙で政界復帰し、1990 年、ロシア共和国最高会議議長となる。最後となったソ連邦共産党 28 回大会席上、示威的に離党した。1991 年 7 月には選挙によりロシア共和国大統領となり、8 月に起きたヤナーエフらのクーデターに徹底抗戦を呼びかけ失敗させた。このあと 12 月、彼はゴルバチョフ追い落としのため、ソ連解体を仕掛けた。新生ロシアを普通の国にしようという彼の努力は実を結ばず、次第にひろがる権威の低下の中で、1994 年、ロシア連邦への加盟を拒むチェチェンへの侵攻に踏み切り失敗した。健康を害した彼は、再度のチェチェン侵攻開始の最中、1999 年大晦日を持って、免責特権と引き換えに大統領職を、連邦保安庁 (FSB)出身のプーチン首相にゆだねて電撃的に辞任した。

ウラジミール・プーチン(1952 年-) サンクトペテルブルグ (レニングラード) 出身の元 KGB (国家保安委員会) 将校。サンクト・ペテルブルグ副市長から政界に入り、その後、FSB=連邦保安庁長官、首相となる。2000 年から 2008 年、ロシア連邦大統領としてチェチェン戦争遂行とそれに伴う人権侵害に大きな責任をおっている。強権主義的な政治手法の一方、チェチェン化の推進者でもあり、ラムザン・カディオフを庇護して、彼らなりのチェチェン復興を実現している。三選を禁じるロシア憲法の規定を守るとして、腹心の部下、メドヴェージェフを首相に抜擢のあと、後継大統領とし、自分は首相として権力を維持した。2012 年には、メドヴェージェフと交代して大統領に復帰する予定。映画監督アンドレイ・ネクラソフは、ドキュメンタリー映画「暗殺 リトビネンコ事件」で、プーチンの副市長時代の、マフィア組織犯罪集団と結んだ汚職事件を取り上げている。映画監督ニキータ・ミハルコフの「12 人の怒れる男たち」は良くできた映画作品だが、親友であるプーチンのチェチェン観を忠実に描いている。

ドミトリー・メドヴェージェフ (1865 年-) サンクトペテルブルク出身で、ユダヤ系。大学もプーチンの後輩。プーチンのサンクトペテルブルク副市長時代のスタッフの一人で、一貫してプーチンを支えてきた。ロシアでは、双頭政治がうまく機能した例がないして、プーチンとの違いを重視する向きもあるが、彼らのやり口は飴と鞭を使い分ける刑事部屋の二人のデカのようなものだ。メドヴェージェフが個人的にはラムザン・カディオフを嫌っているのは公然の秘密だが、彼がプーチンに逆らうことはありえない。

ミハイル・サーカシュヴィリ(1967 年-)ソ連領グルジア共和国の知識人の家庭に生まれた。ウクライナのキエフ大学で国際法を学び、ソ連崩壊後、米国コロンビア大学で修士号をえた。短期間米国で働いたあと、政界入りして当時のシェワルナゼ大統領与党から議会選挙に当選、2000 年には法相となるが、翌年大統領に腐敗浄化の意思無しと批判し、野党に転じた。2003 年秋に選挙不正を批判、大規模デモを組織して大統領を辞任に追い込んだ (バラ革命)。新米反露の立場で、強権的な政治を行い、2008 年には、ロシアの傀儡となっている南オセチア自治区への軍事攻撃を開始、ロシア側の反撃に敗北と口

シヤ側のアブハジア共和国、南オセチヤ自治区の一方的独立承認を招いた。このような失政や、批判はあるが、2006年の議会選挙、2010年の統一地方選で与党が勝利し、国民の支持は失われていない。

ラムザン・カディオフ (1976-)アフマドハジ・カディオフの次男。チェチェン戦争の中、ほとんど教育を受ける機会を持たず成人し、父親のボディガードとなる。独立派との戦いだけでなく、親ロシア派の政敵との血で血を洗う戦いで、自ら、「肘まで血に浸かっている」と認めている。父親の死後、プーチン大統領（首相）の庇護のもと、2004年、第一副首相、2005年首相代行、2007年、大統領、2010年より共和国元首を名乗る。派手好きで、超高級外車購入、ミス・チェチェンコンテスト開催、ドバイカップレースでの米国産競走馬「レイスカー・ラブソディー」号の購入など大金を浪費しているが、連邦予算による膨大な戦災復興資金を獲得して、グロズヌイの廃墟を繁華街に変えた。武装抵抗運動参加者・同情者に対しては、その親族に至るまで過酷な迫害を加え、人権侵害を非難されている。その結果、一種のストックホルム症候群的に、占領下チェチェン国民からの倒錯した熱愛を獲得している。

アンナ・ポリトコフスカヤ (1958年-2006年) 国連駐在のウクライナ外交官ステパン・マゼーパの子としてニューヨークで生まれた。それで米国籍も保持する二重国籍者であった。長じてモスクワ大学ジャーナリスト学科で学び、卒業して政府機関紙「イズベスチヤ」編集部に入社した。1999年にノーヴァヤ・ガゼータ紙に転じ、第2次チェチェン戦争下の一般市民の苦しみやチェチェン侵攻軍の腐敗に関する調査報道を始め、世界的に知られるようになった。彼女はある意味遅れてきたジャーナリストで、第一次チェチェン戦争の報道には参加していない。しかし、第2次チェチェン戦争と言う、政権が批判的ジャーナリズムを敵視し、多くの外国人ジャーナリストが排除され、客観的報道が圧殺された中で、孤立を恐れず、果敢な報道を続けた。彼女は独立派寄りと評価されるが、独立派の違法行為にも容赦はなく、生前には、独立派の一部からは、彼女が殺されないのは、実は連邦保安庁（FSB）の手先だからと言った中傷があった。2006年10月7日、モスクワの自宅アパートのエレベーター内部で、射殺された。下手人はチェチェン人だが、暗殺の首謀者は未だ特定されていない。

ナターリア・エステミーロワ (1958年-2009年) 西シベリア、スベルドロフスク州の寒村で生まれ、チェチェン、グロズヌイ大学歴史学科に学び、1998年まで、中学校の歴史教師であった。第2次チェチェン戦争の中で、人権擁護活動を始め、2000年よりロシアの人権擁護団体「メモリアル」のグロズヌイ事務所スタッフとして活動し、ジャーナリストとしても活動した。ロシア占領軍の人権侵害や戦争犯罪をつくアンナ・ポリトコフスカヤの調査報道のチェチェンにおける主要な協力者でもあった。エステミーロワの調査は、ストラスブールの欧州人権裁判所での被害者たちの主張の根拠となった。一方、グロズヌイで活動する彼女たちの調査成果をカディオフ政権の人権オンブスマンは要領よく利用して、自分たちの連邦に対する要求実現の助けとしていたが、チェチェンがロシア側の北コーカサス対テロ作戦適用区域からの解除後の2009年7月15日朝、グロズヌイの自宅付近で拉致され、夕刻、隣国イングーシのガジユルト村付近の林の中で頭部と胸部に銃弾を受けた射殺体で発見された。彼女は生前、ラムザン・カディオフとその配下の所業を激しく批判していた。このことから下手人は、先ずカ

ディロフ派が疑われるが、チェチェン情勢の安定をうたうカディロフ政権に泥を塗り、対テロ作戦の再適用を狙う者たちが仕掛けた可能性も捨てきれない。

組織名

ロシア連邦軍 狭義にはロシア国防省傘下の連邦軍を意味する。複数形のフェデラールイは、連邦側の北コーカサス対テロ作戦合同グループを指す。これには、国防省傘下の諸軍－陸軍、参謀本部諜報局 (GRU) 特殊部隊、空軍、海軍歩兵部隊、空挺軍をはじめ、内務省軍、地域警察特殊部隊 (OMON)、連邦保安庁 (FSB) 特殊部隊、国境警備軍などあらゆる軍・治安組織が統合されている。

反ロシア勢力/チェチェン独立派

マトリョーシカという、日本の入れ子人形にヒントを得てつくられたロシアの人形があるが、ソ連体制は、この人形に良く例えられる。ソ連自体は、いかなる民族の名も持たず、そのうちに、憲法規定で分離独立の権利を保持する 15 の基幹民族の名を冠した構成共和国で構成されていた。その下に、分離権を有しない、さまざまな民族による自治共和国や、自治区などがあり、さらに自前の行政区画を持つことを許されない諸民族もあった。ポピュリストであり、ゴルバチョフのソ連の弱体化を狙った、ロシア共和国大統領エリツィンは、この民族間格差に対する不満を見て取ると、格差解消を唱え、構成共和国と自治共和国の格差解消を宣言した。1991 年の 8 月クーデターの後、構成共和国は次々と主権宣言を行い、ソ連からの離脱を試みるが、自治共和国の中にも、格差解消により合法的な、連邦離脱の可能性を考える地域が現れた。その中で、最も積極的に独立と、ロシア連邦への加盟を拒んだのが、チェチェン共和国 (イチケリア) であった。共にチェチェン・イングーシソビエト社会主義自治共和国を形成していたイングーシは、ロシア連邦への加盟を選択して、この自治共和国は二つに分かれた。チェチェン以外にもロシア極東のサハ共和国や、ボルガ河中流域のタタールスタン共和国もロシア連邦加盟を保留した。後に後者はロシアの恫喝に屈したが、チェチェンは屈しなかった。当初、手をこまねいていたロシアは、1994 年に軍事的にチェチェンを制圧しようとして第一次チェチェン戦争が始まって、チェチェンの民衆から反撃を食らうことになる。チェチェンの人々は独立と言う一点では団結したが、将来の国家像については、まちまちであった。独立派といっても、西欧型の世俗的民主国家を夢見るもの、慣習法 (アダート) に基づく伝統主義国家を考えるもの、イスラーム法 (シャリーア) に基づくシャリアート国家を志向するものなどがおり、戦間期は、收拾がつかぬほどに乱れた。将来の国家像を巡る論争に加えて、イスラーム信仰も伝統的な土着のスーフィズムを信じるものと、外来のイスラーム急進主義に影響されたものとに分断された。ロシア法のもとでも、正義が実現され、平和に生きられるなら、それで満足だという人々も、チェチェンには少なからずいる。

親ロシア勢力

現在のチェチェン国内の親ロシア派という表現が意味がないほどに、ラムザン・カディロフ派によって、以外の親ロシア派は一掃され、生き残ったものはモスクワなどに逃げ散った。父親の警護部隊長、安全保障会議書記、チェチェン選出元下院議員、陸軍諜報局特殊部隊元隊長、本人の元ボディガードなどが、チェチェン国内はもちろん、モスクワおよびロシア国外で、横死をとげている。

ロシアが帝国の領域を拡大してきて、コーカサス（カフカス）地方に影響を及ぼしだすのは 4 世紀ほど昔になるが、その間に、抵抗し、反逆を企てる人々だけでなく、ロシアに協力的な人々も生まれてきた。帝政ロシアには、ツァーリの近衛兵部隊として、イスラーム教徒の北コーカサス諸民族からなる「野蛮師団」が存在したし、ソ連軍においてもチェチェン兵は如何なる大敵に包囲されても絶対に投降することのない兵士として重用された。1978-89 年のアフガニスタン紛争へのソ連派遣軍では、チェチェン人新兵を入れておくと部隊の士気が向上すると前線のソ連将校が奪い合った。ロシア社会には、根強いチェチェン人差別や偏見が存在するが、一方でこうしたチェチェン重視の傾向もあることを無視できない。プーチンのチェチェン化政策は、こうしたロシアに従順なチェチェン人の増加を目指している。さらに、チェチェンは、小国だと強調されすぎる傾向にあるが、カフカスの少数民族の間では、比較的に大きく、ロシア連邦の 120 以上の諸民族の間では人口数が上から 5 番目であり、零細民族ではない。しかも、この地域において何かにつけても仕切り役となるのが、チェチェンであり、チェチェン人なので、ロシアのコーカサス支配にとっては、チェチェンは失うことを許されない存在なのである。石油と言う資源以上に人的要素も無視できない。

武装抵抗運動 ロシア当局は、チェチェン戦争とはいわず、北コーカサスにおける憲法秩序の回復と、対テロリズム作戦と称し、敵対し、抵抗する人々を、不法武装集団と規定しているが、独立派は、独立宣言の直後から、独立国家の当然の権利として、正規軍を組織し、ハーグ陸戦条約、ジュネーブ諸条約など戦時国際法の交戦規定遵守を心がけた。また、独立派のドゥダーエフ政権は、コーカサス全域に共通する成人男子の帯剣・帯銃の慣習を当然合法的権利と認めた。また旧ソ連がコーカサス地域に蓄積していた膨大な武器の一部が、共和国政府側に確保されていた。このため、いったんロシアが侵攻を開始すると多くの市民が自ら武装して義勇兵となって参戦した。さらに、独立を守るチェチェンの戦いに共鳴して、外国人義勇兵がやってきた。イスラーム聖戦（ジハード）が叫ばれるようになると、ムスリム（イスラーム教徒）として参戦する人々の数が増した。彼らはムジャーヒド（聖戦士）と呼ばれ、近代的な戦時国際法ではなく、イスラーム戦争法に従って行動する。第一次チェチェン戦争時には、武装勢力の司令官たちは、野戦司令官と呼ばれていたが、第 2 次チェチェン戦争では、イスラーム戦争法に従うものが増えると、同義ではあるが、アミルという言葉が、次第に多く使われるようになった。

IIPB (International Islamic Peacekeeping Brigade) アラブ義勇兵ハッターブと、有力野戦司令官シャミル・バサーエフにより 1998 年に組織され、ダゲスタン侵攻事件を引き起こしたイスラーム急進主義（いわゆるワッハビート）の部隊名。チェチェン人もいたが大部分は、周辺諸国からの義勇兵たちだった。一時的な呼び名であったが、ロシア各地で発生した集合住宅爆破事件と並んで、ロシア側の再介入の口実となった。

チェチェン軍 第 2 次チェチェン戦争当初は、マスハドフ大統領派正規軍部隊が、チェチェン軍を名乗っていた。1999 年秋のロシア軍の再侵入から 2000 年 1 月まで、チェチェン軍や義勇兵は、首都グロズヌイに籠城して包囲したロシア軍に対抗した。しかし独立派は、1 月 30 日に首都を放棄して、破壊工作班を遺して、平原部を撤退し、南部山岳地帯に移ってパルチザン戦法に移行した。このとき首都周辺は地雷原で包囲されていた。従って首都脱出には、地雷原突破しか選択肢が無かった。チェチェ

ン側がロシア軍から避難回廊を金で買ったという主張もあるが、避難回廊は、元もと無かった。この地雷原突破で 400 名近くの死傷者がでたが、5000 名以上の兵士や一般市民は、地雷原横断に成功した。その後、2002 年夏まで、ばらばらに戦っていたマスハードフ派チェチェン軍とバサーエフ派のムジャーヒドたち武装勢力は、軍事的統合を果たした。しかし融合はありえず、後者は、2007 年に周辺国出身イスラーム主義義勇兵らと、北コーカサス全域にわたるイマラート・カフカス（カフカス首長国）を結成し、自らを民族主義的な「チェチェン独立派」であることを否定した。

ハジムリート チェチェンの伝統的信仰は、スーフィーというトルコから中央アジアに広がるイスラーム神秘主義の系譜に入る。そのチェチェンにおける教団組織の最大のものがハジムリート（カディーリー教団）である。ハジムリートという呼び名は、トルコからの招来者、クンタハジ（ハジムラート）により、カディーリーは、創始者カーディルによる。第 2 位のナクシュバンディー教団の方が、歴史的には古く、19 世紀のカフカス戦争の主役はナクシュバンディートたちであった。ナクシュバンドは、ウズベキスタンのブハラ生まれの導師である。独立派ハジムリートの殉教精神が、あまりにも強烈なため、多くの命が失われ、急進イスラーム主義に対し数的劣勢を招いたとムスリム・ジャーナリストである常岡浩介は指摘している。

ワッハブ派 ロシア語圏では、ワッハビートは、急進的イスラーム主義者に対する否定的な呼び名である。アラビア人イスラーム復古主義者ワッハブの名に由来する。北コーカサスのイスラーム地域では、伝統に無知な若者たちの急進化、アラブ系義勇兵の流入、ロシア側の伝統的イスラームへのゆさぶりや煽動など、いくつかの要因で、1990 年代後半、急激に力を増した。

メモリアル 「記憶」を意味する名称の、ソ連時代末期の 1989 年にソビエト全体主義、特にスターリン主義の犠牲となった市民抑圧に対する記録の整備と治安当局の隠蔽と戦うために組織されたロシアを中心とし、周辺国にまたがる国際市民運動。人権擁護や強制収容所の実態暴露などにめざましい成果をあげてきた。チェチェン戦争に対し、人権擁護の立場から積極的関与を続け、チェチェンに支部をつくって、チェチェン人権活動家に便宜を提供してきた。また、ニュースサイトを開設し、チェチェン・コーカサス情報の提供をロシア語と英語で続けている。

『**ノーヴァヤ・ガゼータ**』は、1993 年に、ソ連時代リベラルな論調で人気のあった新聞「コムソリスカヤ・プラウダ」紙の編集方針にあきたらなくなった数十名のジャーナリストが、より良い新しい新聞（ノーヴァヤ・ガゼータ）を目指して創刊した。週 2-3 回発行の紙に印刷されたタブロイド版新聞であるが、多くの人々は無料でアクセスできるインターネット版を読んでいる。鋭い政権批判の論調は良く知られているが、総合紙であり、内容は豊富だ。評論員アンナ・ポリトコフスカヤ記者をはじめ、副編集長だったユーリー・シコチーヒンなど多くのジャーナリストを殺害されており、協力スタッフまでいれると 8 名が犠牲となっており、襲撃されながら生きながらえた者を入れると 10 名、脅迫を受けたものは数知れぬ。ソ連元大統領、ミハイル・ゴルバチョフも株主の一人である。

ロシアのマスコミ ロシアのテレビ局のほとんどは、プーチン政権の厳しい統制下にあり、自由な報道には程遠く、新聞も多くは、与党勢力のものになっている。しかし、「ノーヴァヤ・ガゼータ」も健在であるし、周辺国に移って活動を続けるジャーナリストもいる。ロシアジャーナリスト同盟で、「警鐘緊急ジャーナリズム」サイトを開設して、当局から不当な扱いをされたジャーナリストや事例を積極的に紹介していたオレーグ・パンフィーロフはグルジアに移って、ロシア語テレビ局「カフカス第一放送」を始めている。インターネット報道は、第2次チェチェン戦争の大きな特徴で、この戦争は、「第一次インターネット戦争」と言うような色彩を帯びている。チェチェン側も分裂が激しいが、各勢力がさまざまなウェブサイトを活用している。またウェブ上の情報源としては、英語版・ロシア語版のウィキペディアも挙げておきたい。記載解説はかなり中立性を配慮したものになっている。またロシア語サーチエンジン「ヤンデックス」では、ロシア当局が潰しにかかっているようなサイトや、記事も検索できる。

あとがき

取り上げた項目については、追加が望ましいものも多いが、暫定的なものとして捉えていただきたい。これまで「チェチェン総合情報」などにかかなりの情報が蓄積されているが、あまり紹介されていない角度からの紹介を心がけたので、奇異に感じられるものも多いかと思うが、お許しいただきたい。(岡田一男)